

福島大学附属図書館報

No.36 2006.4.1発行

〒960-1293 福島市金谷川1番地  
TEL (024) 548-8083  
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>  
携帯電話版  
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm>

福島大学附属図書館



書 燈

## 「書」は知の礎 (いしずえ)

附属図書館長 小 沢 喜 仁

17世紀、興味や関心を同じくする科学の愛好家は、地域などにおいてサークルを結成し、手紙を主たる伝達手段として自らの研究成果の情報交換を行っていました。彼らの多くは、実験や数学を駆使して自然を研究し、とりわけ自然科学に関する多くの研究が次々と発表されるようになるのです。1665年にはロンドン王立協会の雑誌として「哲学会報 (Philosophical Transactions)」が月刊誌として定期的に刊行され、彼らの手紙を活字化して多くの人に配布することにより、研究成果に関わる情報が迅速に、広範に、かつ正確に伝わるようになりました。また、これを契機に、学術雑誌に研究成果を発表することで、研究者が新たな知の発見に対する先取権 (Priority) を獲得し、そして発見に対する名誉を得るとともに、その発見を人類の共通な財産とするという考えが成立するのです。

ヘンリー・キャヴェンディッシュ (Henry Cavendish, 1731~1810年) は、この時代の英国の化学者・物理学者です。彼は、1766年、「哲学会報」に「人工空気に関する実験についての3つの論文」を発表し、亜鉛、鉄、錫などの金属を酸に溶かすと可燃性の“人工空気”が発生し、その重さは空気の11分の1であると報告したのです。のちに、ラボアジェによって物質の燃焼に関わる「フログストン (燃素)」の存在は否定されるとともに、この可燃性の“人工空気”は“水素”であることが明らかになります。

キャヴェンディッシュは、1784年酸素と水素の化合による水の合成や、1798年地球の密度測定の実験などを行っていますが、「哲学会報」に報告されたのは18の論文にすぎませんでした。放置されていた未発表の報告は、彼の没後マクスウェルにより、遺稿の調査と原稿整理が

行われ、実験を再現した上で、1879年「キャヴェンディッシュ電気学論文集」として出版されました。その中には、1772年静電気力の逆二乗則 (クーロンの法則として知られていますが、クーロンが発表したのは1785年) や、1781年オームの法則の発見 (オームが発表したのは1827年) などがありますが、潜熱の発見や気体の膨張に関するゲイ=リュサックの法則など、大きな発見の10年以上も前に実験をしていたことがわかります。



キャベンディッシュは、彼以外、誰も理解することのできない、あるいは、その存在に気がつくことすらなかったような難しい問題を解決するために、もっとも骨の折れる研究に取り組み、その結果がうまくいっていれば、それだけで満足していたように思われます。彼にとっては、研究そのものが重要なものであり、発表は二の次であったようですが、その成果は確実に「報告書」としてまとめられていたのです。自分の考えを整理すること、成し遂げたことを成果としてまとめること、また他の人に情報として伝え交流すること、「書いたもの」としての重要性がここにあります。

私たちは、文字や式により、情報を整理し、体系化して、そのことにより新たな創造を目指して思考しているように思います。東北地区にある大学附属図書館として多くの蔵書を誇る本学の附属図書館であります。大学の使命である研究、教育そして社会貢献を支える知の基盤として、学生諸君には、「書」の重要性を理解して、積極的に図書館を利用していただきたいと考えています。

# 「海外の図書館事情」

経済経営学類 東 田 啓 作

私が滞在していたUBC (University of British Columbia) は、カナダ西部のバンクーバーにあります。福島大学との提携大学であるヴィクトリア大学は、車と船で合わせて3、4時間のところにあります。UBCは、様々な学問分野を持つ大規模な総合大学です。そのため、総合図書館のほかに、Math Library、Music Library、Law Libraryといった専門の図書館もあり、全部で15を越える図書館を有しています。また、大学自体は市の中心からバスで30分くらいのところにあるため、市の中心部にも小さな図書館を持っています。

私がよく利用していたのは、Koerner Libraryというところで、蔵書は社会科学系の図書が中心でした。私のオフィスのあるビル（ビジネススクール）の隣にあり、夜11時まで開いていました。基本的に全て開架式で、地下3階、地上6階のとても大きな図書館です。

土曜日や日曜日でも夜遅くまで開いています。夜にはキャンパスバスが走っており、図書館前にもバストップがありました（このバスはスピードが遅いので、私は利用しませんでした）。

閲覧やコピーは図書カードがなくても可能です。入った所にコピーカードの自動販売機がありますし、コピー機はいくつかのポイントにかなり多く設置されています。マイクロフィルムも誰でも自由に見ることが可能でした。検索用のパソコンの端末は数多く設置されており、最初見たときは「たくさんあるなあ」くらいに思っていました。が、いつもその多くの端末が学生さんで埋まっているのを見て、少しびっくりしました。また、学期中の平日は閉館時間近くまで多くの学生さんが勉強しているのを見て、図書館が勉強する場の1つとして定着しているのだということを実感しました。図書館のロビーのようなところのテーブルでも、いつも数人の学生さんごとにグループができていて、活発に議論をしています。

研究にとって重要な論文の大半は電子ジャーナルで自分の研究室の端末から見る事が可能でした。また電子ジャーナルなどのサービスは、図書館のアカウン

トさえ持っていれば、学外からでもアクセスすることが可能です。自宅で夜などにちょっと論文を見たいときなどにとても便利でした。

実は、この図書館に入って右手には、ビデオコーナーがあります。ドキュメンタリー、研究用のものもありますが、映画やドラマなども置いてあります。ビデオデッキもいくつか置いてあり、研究に疲れたときや、英語のリスニングの訓練をするときによく利用させていただきました。

Koerner Libraryはとてもきれいなのでそれはそれで良かったのですが、よくありがちな「ちょっとカビくさい」図書館はないのだろうかと思っていたところ、…ありました。あるとき古い図書を探して別の図書館に行ったところ、閉架式で狭くて暗くて、方角が分からなくなる書庫があり、なんとなく安心しました。ただその図書館は、滞在の後半に取り壊されつつあったので、今もあるかどうかは定かではありません。

バンクーバーは、4月くらいから9月末までは乾期で、基本的には晴天が続きます。一方、10月から3月くらいまでは雨季で、雨の日が多いです。特に、11月と12月は毎日雨という感じです。ちょうど9月の新学期が始まってすぐあとから学期が終わる4月まで雨季ということになりますので、勉強に集中でき、図書館で勉強するにはちょうどいい具合です。

さて、土曜日や日曜日でも開いている図書館ですが、一年中開いているわけではなく、やはりChristmasからNew Year's Dayまでの10日間程度は全ての図書館が閉まります。その期間は、大学は本当に静かになります。



## 「こんなものがあつたのか！」

～世界の言語ガイドブック～  
教育学部卒業生 厚美 哲也

国際社会と呼ばれる今、様々な国の情報が錯綜しています。そんな御時世、私達は様々な国に目を向けられますが、ある一つの国に興味を抱きその国の文化を調べていくうちに、多くの人はその国でどのような言語が使われているのか気になるでしょう。あるいは、外国に関するニュースが流れていて、下にテロップで見たときがないような文字が流れていて、「何語だろう？」と疑問に思う、そんな偶発的なきっかけで特定の言語に興味を持つ人もいるかもしれません。どんなきっかけにせよ、ヒトである以上言語に対する興味は尽きないと思います。

世界には数千の言語があると言われていています。その数千語の中から約四十の言語を集めて、東外大の先生方が編纂してまとめたものが、今回紹介したい本、『世界の言語ガイドブック』です。この本の特徴は、ヨーロッパ・アメリカ編とアジア・アフリカ編の二巻に分かれているのですが、国連の公用語として話されているメジャーな言語から、古代スラブ語や満州語のように、日本ではあまり知られていないような言語ま



で扱っているという点です。掲載されている言語それぞれに、十ページ程度の詳細な説明がされています。文法のように難しい説明もありますが、挨拶の仕方、知って得する〇〇語情報のようなコラムも充実して、大変読み易いです。また、参考図書に掲載もあり、読者が気に入った言語の学習を続けられるよう入門書・辞書などの紹介もされています。

この本を一読すると、一気に約四十の言語の概観ができます。あまり外国語に興味もない人も、興味を抱く言語が見つかると思います。日本語も掲載されています。今一度、自分が毎日使用している言語がどのようなものであるか知るためにも、一読をお勧めします！

『世界の言語ガイドブック』三省堂 1998.3

東京外国語大学語学研究所編

(請求番号：1 ヨーロッパ・アメリカ地域 801/To46s/1

：2 アジア・アフリカ地域 801/To46s/2)

## 「困った時はカウンターに!!!」

—カウンターの内側から—

伊藤 智恵子



カウンターの仕事を始めたばかりの頃は毎日が驚きと発見の連続でした。書庫の広さと本の多さ、雑誌の種類や多種多様な検索システム。所在場所が不明になってしまい見つからなくなる図書も多く、見つけれずに落ち込むこともありました。1度見つからなくなってしまう図書は探し出すのがとても難しく、そのまま紛失してしまうことが多いのです。相互貸借や文献複写などを利用して他の大学図書館などから借りることや文献を取り寄せることなどもできます。利用されたことがない方や分からない時には、気軽にカウンターに声を掛けて下さい。あまり図書館

に来られたことがない方には、一見気難しいような雰囲気や手続きがあるように見えるかもしれませんが、実はとても居心地が良かったりします。一般の方にも図書館の良さを知ってもらい少しでも足を運んで頂きたい、学生の皆さんには効率よく図書館を利用して頂きたい、皆さんの要望に少しでも応えられる様にとカウンターでの業務も日々努力しています。検索の仕方がいまいち分からない時、どんな図書を参考にすればいいのか迷った時もカウンターに一声掛けてみて下さい。情報検索講座に参加するのもお勧めです!!自分が知りたい情報やノウハウ(全国の大学図書館等が所蔵する図書や雑誌の検索、論文の引用文献情報、雑誌記事索引の検索、法律判例文献情報など)が適格に身に付きますよ。

### 「逸話」 転載のいきさつ

経済界のトップとして活躍している福島大学経済学部OB有志の集まりに、「メローサミット」という会がある。ちょうど発足のころ学長に就任した私も、客員として会の末席を汚している。最近、この会が、発足十周年を迎え、『信夫の風』という冊子の第二集を上梓した。この文集に、単行本だけでなく、著名出版社のPR誌をも丹念に収集・渉猟して纏めた新保芳栄さんの掌編「経済学部関係逸話」が載っている。

新保さんは、1971年に経済学部を卒業、日本銀行に就職した俊秀である。日銀では、在学中（興津ゼミ）の景気変動の実証的研究を評価され、主に調査畑を歩まれた。その後、キャリアをかわれ、金融危機の渦中で、金融システム問題の研究・処理に携わり、現在は、整理回収機構執行役員の要職に就いておられる。ちなみに、氏には、『実務者からみた金融機関行動の不良債権問題』（八朔社）をはじめ、多くの著述もある。

先の労作「経済学部関係逸話」に感心した私が、『書燈』に転載を仲介したのだが、筆者および『書燈』編集委員会ともに快諾してくださり、ここに実現をみた。  
（名誉教授・吉原泰助）

## 「各種出版物に掲載された経済学部関係逸話」 ～『信夫の風』～

新保 芳 栄

単行本、雑誌や出版社のPR誌等を読んでいると、思わぬところで、福島大学経済学部に関する記述を目にすることがある。最近インターネットを使って「福島大学経済学部」を例えばヤフーで検索すると、二千以上の件数がヒットする時代であるが、こうした出版物の記述も学術的な話題はもとより、大学の情景、教授評、教授人事等興味深いものが多い。経済学部関係のエピソードについては、もちろん『福島大学経済学部五十年史』（財界評論新社）、『信陵の花霞』（八朔社）、中山善郎『私の履歴書』（深夜叢書社）や小林昇『山までの街』等に詳しいが、それらと視点の違いや若干ニュアンスの異なる点もあり、中々面白い。以下、これまで折に触れて目にしてきたものの幾つかについて、紹介させていただくこととする。（肩書等は掲載時のもので、原則として経済学部関係者は先生、その他は教授で呼称を統一）。

「UP」（東京大学出版会）の二〇〇四年三、九月号に高田康成東京大学教授によるドイツの哲学者カール・レーヴィットの一九三六～四一年の旅日記の翻訳が掲載されている。レーヴィットは母親がユダヤ人であったため、ナチスに追われ一九三六年に第二の亡命先となった日本へ向かった。東北帝国大学に職を得たのであるが、福島高等商業学校でも週一回ドイツ語の授業を持つことになっており、仙台へ赴任する途中、福島駅で榊原巖教授に迎えられたこと、後日福島高商へ挨拶に行った様子が描かれている。昭和十年代始めの「田舎風の講堂へ向かえば、田舎出らしい日本の生徒が、黒い制服に身を包んで、軍隊風に起立と着席の命令に

服従した」高商の模様と、皆が分かるからという理由で英語での挨拶を要請されたことなどが述べられている。また当然のことながら、ゲイテンビー先生との交流もあった旨触れられている。

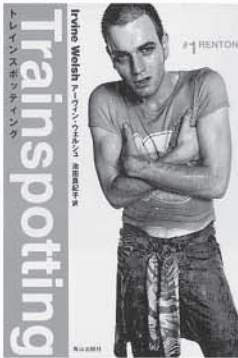
教授の人物評でみると、藤田五郎と庄司吉之助両先生関連の記述が目立つ。藤田先生に関しては、大塚久雄『社会科学と信仰と』（みすず書房、一九九四年）に藤田が大塚ゼミに参加した頃（昭和十四、五年頃）の様子、当時まだあまりパツとした存在でなかった福島高商に就職したが、その後小林昇先生や熊谷尚夫先生と協力して中村学部長を助けて見事な経済学部を創り上げ、福島大学経済学部は学界では最早誰一人知らぬ人もないほどの確固とした地位を築くに至ったこと、自分は今でも、大学の振興や改革を論ずる人々には、様々な論点に加えて、藤田、小林両氏のこの業績を今一度振り返ってみよう勧めることにしているといった点が言及されている。また、服部之総『原敬百歳』（中公文庫、一九八一年）では、「藤田五郎の死」と題した追悼文で藤田の死の直前の様子を生々しく描き、「まことに彼くらい接したほどのすべての人から、愛され、尊敬され、信頼された人物は、この三位を一体に具備した人物は、わたしの五十二年の生涯のうち、他に一人も見ることがない」と結んでいる。  
つづく

（『信夫の風』第2集より転載 第1回）



## 思い出の一冊 ～アーヴィン・ウェルシュ著 『トレインスポッティング』～

経済経営学類 佐々木 俊彦



芸術とはそもそも人を選ぶものだが、これほど人を選ぶ小説も珍しい。ドラッグとアルコールとセックスとバイオレンス。エディンバラのちんけな若者たちが怠惰と無気力と絶望のなかでのたうちまわる。それでいて青春のかそけきりリズムにことかかない。『トレイン

スポッティング』とはそんな作品だ。

作者のアーヴィン・ウェルシュは、1961年（1958年説もある！）にエディンバラの港町リースのワーキングクラスの家庭に生まれた。この出自を考えれば、彼がオックスブリッジ出のミドルクラスのイングランド人作家を仮想敵としていることもおのずから領けよう。ウェルシュは、イギリスでは社会的にも文学的にもマージナルな存在だ。私がイギリスに留学中、ウェルシュを読んでいると言うと、相手の態度が豹変することがよくあった。ウェルシュは、「常識ある」保守的な大人からは煙たがられる胡散臭い危険分子なのである。大学人たるもの（とくに文学者）はそんな先入観を持ってはいけないと私は思うのだが、大学教員のなかにも保守的な人は多い。ウェルシュの支持層は比較的若い人たちであり、とくにレイヴァーやクラブパーにカルト的人気を誇っている。

『トレインスポッティング』は、形式的には純粹な長編小説というよりも登場人物を共有する短編集であり、それらの短編のほとんどがそれぞれの登場人物によって語られる。読者は、彼らの一人称の語りに耳を傾けているうちに、ブラックユーモアに満ちた社会派リアリズムの世界に引きずり込まれることになる。この世界は情緒的に濃密で、ときおり妙に哲学的だ。主たる語り手のマーク・レントンは、世間に反抗して、「人生を選ばないこと」を選んだちんぴらジャンキーである。彼は、おのれを殺さずその青臭い唯我論的ニヒリズムから脱却することができるのだろうか。彼とその悪友たちを待ち受けている未来とは。最終章でレントンが行なう選択は、倫理的にも文学的にもピミョーなものである。

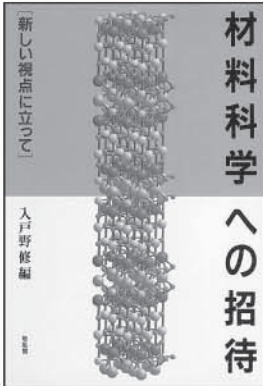
しかし、本篇の眼目とでも呼ぶべきものは、その結末ではなく、登場人物たちに対する神のごとく深い作者の理解と共感と感情移入であろう。ウェルシュはあるインタビューのなかで、「もし登場人物が外国人嫌いであったり、偏狭であったりした場合は、作家は彼らにそのように語らせなければならない」という趣旨のことを述べている。この作家的信念と良心は多くの誤解を招いているようである。だが、ウェルシュのこの態度は全く正しい。われわれは、この小説を読むことによって、なぜ彼らがヘロインをはじめとする悪に手を染めるのかを、哀惜の情を込めて、つぶさに理解することができるからだ。問題を解決するためには、まず理解することから始めなければならない。

というわけで、『トレインスポッティング』は第一級の青春文学だ。その重要性を『ライ麦畑』になぞらえる人もいるが、私としては太宰治の『人間失格』と比べたい。両者はみずみずしい感性と痛切な感動の質を共有している。しかし、葉蔵は社会的に破滅し、レントンはしたたかに生き延びる。これは考察に値する問題だろう。

『トレインスポッティング』の原作は1993年にイギリスで出版され、1996年には映画版が封切られ、同年に邦訳も出版された。原作小説、映画版そして翻訳と、そのすべてが高水準なのは本当に稀有なことだ。ユアン・マクレガー主演の映画版を見た方は少ないと思うが、映画と小説は異なるメディアである。両者は全く別物だと考えるべきだ。原作小説の大部分は日本人には難解なエディンバラ方言の一種で書かれており、英文学の専門家以外は手を出すのはやめた方がよい。原作小説と翻訳もまた別物であるのは論をまたないが、この翻訳は原作の雰囲気やうまく伝えていてすばらしい。私は、この訳書を読んだとき、感激して翻訳者の池田真紀子さんにメールを書き、丁寧な返事をいただいた。でも、『トレインスポッティング』を読んで、誰でもが感動できるわけではない。感動できるのは、この小説と共鳴するなにもものかを持っている人だけだ。それが何なのかは、この本を読んで確かめてみるしかない。



## 学内教員著作寄贈図書



『材料科学への招待—新しい視点に立って—』  
培風館 1997.6  
入野 修 編  
請求番号：501.4/N88z

本書は、材料（金属・有機・無機材料）が有する魅力と材料研究のおもしろさを余すところなく伝えるユニ

クな入門書である。材料分類枠を越えて様々な研究分野の話題を豊富に盛り込んで解説している。身近にあるテーマを出発点として日常用語で丁寧に説明しているの、材料研究のおもしろさの具体的なイメージが描ける。各テーマとも分かり易いことばで、基礎事項から先端研究の動向までを詳しく説明している。本書で材料研究の多様性と将来の展望が見えてくるであろう。

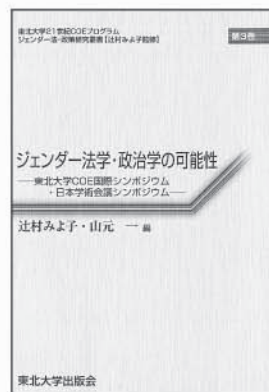


『材料の科学と工学』  
全4巻  
培風館 2002.6~7  
入野 修 監訳  
請求番号：501.4/C13z/1~4

本書は、キャリスターの原著「材料科学工学」を編訳した初学者・技術者・研究者のための入門書である。

材料研究に即応できるように、材料の基礎から応用までを、数多くの図版と写真を用いて易しいことばで解説している。また、読者を最新の応用、環境問題や社会的問題にまで気を配れるよう意図して編集している。各章のはじめに何を学ぶかを明記し注意を喚起し、章末で内容と重要な用語をまとめ、練習問題に詳細な解答を付し、理解度を自己評価できるよう配慮している。

(文：入野 修)



『世界のポジティブ・アクションと男女共同参画』  
東北大学出版会  
2004.3  
辻村みよ子編  
請求番号：367.2/Ts44s

『ジェンダー法学・政治学の可能性』  
東北大学出版会  
2005.4  
辻村みよ子 山元 一 編  
請求番号：367.2/Ts44j

(フランスの例)、議会や企業における政策・意思決定過程に女性を積極的に登用するポジティブ・アクション政策を展開している。その動向を知り日本にいかすためのきわめてタイムリーな出版といえる。

第3巻は、2つのシン

「ジェンダー法・政策」研究という新たな学問分野の確立をめざした21世紀COEプログラムによる研究叢書の第1巻と3巻である。第1巻は、日本における最も喫緊の課題の1つ「政策・意思決定過程への男女共同参画」、そのためのポジティブ・アクションに関して、国連、EU、欧米諸国などの最新情報と理論的課題を検討している。日本は、女性の能力開発水準においては世界のトップクラスにありながら、その能力を社会に活かしているかどうかの指数においては第三世界並みの水準にある。他国では立法によって、あるいは憲法改正まで行なって

ポジジムの記録である。1つは、同COEプログラムが主催し、米、仏、韓国と日本のフェミニズム法学等の第一線で活躍する研究者を多数招いて行なわれた国際シンポジウムであり、もう1つは、日本学術会議で開催され、日本の法学諸分野・政治学でジェンダー研究に携わる代表的研究者が、それぞれ報告したシンポジウムである。いずれの報告も、諸外国および日本の法学諸分野等における「ジェンダー法・政策」研究の、現在の到達点を知ることのできる内容であり、貴重な著作となっている。

(文：中里見 博)



『スポーツによる地域貢献で大学は変わる』  
大修館書店  
2004.12  
福島大学スポーツユニオン編  
請求番号：780.2/F84s

福島大学スポーツユニオンは、「スポーツ」と「地域貢献」をキーワードとして、2001年7月に保健体育科の教員有志で立ち上げたものです。

時は、大学改革の真っ最中。地域と大学が連携・協力した双方向の事業が模索されていた時期です。われわれは、そうした社会の動きをいち早くキャッチし、各人の専門分野

を生かしながら、地域との共同研究を推進していく体制づくりを急いでいました。

そんな折り、富岡町より町民の健康増進、競技力の向上、総合型地域スポーツクラブの育成等への協力依頼が舞い込んできました。2002年度からの共同研究という形でスタートした富岡町との連携は、翌年3月には「さくらスポーツクラブ」を誕生させ、町民の自主参加による運営体制もでき、3年で大きな成果を上げることができました。

本書は、その成果をまとめたものです。また、この間に多くのパートナーシップ事業が誕生し、各地に根をはることができました。開かれた大学が学生を変え、地域を変えていく、そんなメッセージを込めて編集したものです。

(文：中村 民雄)



『大鏡の史的空間』  
風間書房 2005.9  
勝倉壽一著  
請求番号：913.42/Ka87o

『大鏡』は、藤原道長の全盛期である万寿2年を基点として、天皇親政から藤原氏北家による専権への道を開いた平安前期から中期に至る170年間の歴史の展開を、190歳と

170歳の老人の体験談として記した歴史物語である。

現在、『大鏡』の研究は、道長を摂関政治の理想像として描いたとする解釈と院政賛美の立場から道長批判を

目的としたとする対照的な理解、及び、「かな書きの歴史書」と捉える立場と虚構性の豊かな文芸書とする立場が対立する。

本書は、二元的対立と見なされる研究の閉塞状況を乗り越えるために、奈良・平安・鎌倉期の政治史史料をはじめ、民俗学、宗教学、建築学、住居学、海外との交流史などの当代史料、及び先行研究の成果を可能なかぎり導入して実証的に歴史的空間を構築し、その上に代表的な説話・逸話を重ねることにより、天皇親政から摂関政治へと動く歴史の展開相と作者の歴史意識の解明、浮沈する多様な人物形象の詳細な分析、及び代表的な説話・逸話の新たな解釈を提示したものである。

(文：勝倉 壽一)

## 目 次

- 巻頭言『「書」は知の礎(いしずえ)』……………小沢 喜仁(1)
- 「海外の図書館事情」……………東田 啓作(2)
- 「こんなものがあったのか！」～世界の言語ガイドブック～……………厚美 哲也(3)
- 「困ったときはカウンターに！！」ーカウンターの内側からー……………伊藤智恵子(3)
- 「各種出版物に掲載された経済学部関係逸話」～『信夫の風』～……………新保 芳栄 紹介文・吉原 泰助(4)
- 思い出の一冊『トレインスポッティング』……………佐々木俊彦(5)
- 「モーツァルト生誕250年によせて」ー聖人は終に大を為さず、故に能く其の大を成すー… 澁澤 尚(6)
- 学内教員著作寄贈図書を紹介
  - 『材料科学への招待』『材料の科学と工学』……………入戸野 修(7)
  - 『世界のポジティブ・アクションと男女共同参画』
  - 『ジェンダー法学・政治学の可能性』……………中里見 博(7)
  - 『スポーツによる地域貢献で大学は変わる』……………中村 民雄(8)
  - 『大鏡の史的空間』……………勝倉 壽一(8)